病院図書室　14(1):1-2, 1994

巻頭言

図書室雑感
― 古い文献カード ―

国立姫路病院長　田村　忠雄

子供の頃のあこがれの一つに本屋の主人になってみたいというのがあった。このような夢を持ったのは私一人ではないのではあるまいか。一日とっぷり本の中につかって飽きるまで好きな本を読んでみたい。そのような少年の夢がある日突然医師の私に叶えられたのである。

大学院の研究を終わったが、臨床に追われてなかなか論文が書けない。いつまでも独立できない私の不精な性格を思案されてか、恩師の前川孫二郎教授（京大第三内科）は助手に任命されたばかりの私の仕事として先生の臨床講義の文献係を命ぜられた。昭和38年頃のことである。毎週火曜日の午後に行われる内科の臨床講義のテーマに関する最新の内外の文献を準備することで、そのテーマは木曜日の回診中に最も興味を持たれた患者の病名から回診の直後に病棟主任に話されるのが常であった。だから、文献係は既に回診中から先生が主治医との討論の中でどのような患者の、どのようなことに興味をもたれているかを察知しなければならなかった。しかもその作業は翌日金曜日のポリクリと言われる外来実習が終了するまでに完了しなければならなかった。外来を終えられた先生は文献係が準備した数冊の図書を鞄に入れて自宅へ帰られるからである。土曜日、日曜日は先生は臨床講義の準備のため書斎に籠もられるのが常であり、文献係の選んだ文献が適切であったかどうかは翌週の火曜日の臨床講義のなかにそれがどのように引用され話されるかによって評価が下されるのである。それは準備した私だけにしか分からぬことであった。

私はそのような与えられた任務を忠実に果たすために木曜日の回診が終わって教授から臨床講義のテーマが発せられるや否や、昼食もそこそこに急いで内科の図書室に飛び込む。当時は京大医学部には総合図書館はなく、内科の図書室が最大でそこに多くの図書を有していた。Index Medicusをテーマを頼りに引いて年代を遡っていく。これと思う文献を挙げて図書係にお願いすると、すぐに出していただける。その機敏な動作が素晴らしかった。さすがは大学の図書室だなと感心したものである。これはその本がどこにあるということが常に頭の中に整理されていなければできないことである。次に集められた文献の内容の検討に入る。今日の回診の中で先生が主治医と話をされた内容に最もマッチしている内容の論文を選び出さなくてはならない。多くの文献の中で先生の最も興味を持たれるものを選ぶことが大切なのである。多くの論文の中から、しかも最新のものせいぜい２～３編を決しかねて５～６編にもなることがある。そのために役に立ったのが要旨(abstract)である。今ではさらにkey wordなるものがあるが、当時の論文にはそのようなものはまだなかった。要旨だけで判断できない時は本文を熟読しなければならない。とにかく、多くの中から必要なものだけを選ぶという作業は骨が折れた。これは語学力だけの問題ではなく、内容を理解するだけの医学の力が不足しているからであった。ここに至って自分のいたらなさをいやというほど思い知らされた。それでも選ばなければならない。なぜなら先生の鞄の容積には限りがあるから。こうして、毎週木曜日の午後は図書室の係の方々の大変なお世話になり文献の検索をさせていただいた。Monographに限らず、どんな年代の、どんな内容の文献でも、頼めばさっと出してくださった図書係の

方々の親切であざやかな振舞いはさすがはプロだなと感心したものである。

こうした私の努力は、先にも述べた通り、先生の臨床講義の中で報われるものであった。それは文献を準備した文献係の私にのみ理解される先生の講義の中の言葉の端々であった。ある時には相当の分まで講義に引用してくださることもあり、ある時には全然引用してもらえないこともあった。これは私の助手としてのいたらなさであり、医学に対する平素の不勉強を諭される恩師の鞭でもあった。私の内科助手としての仕事は勿論この事ばかりではなかった。診療も研究も大学院時代と同様に続けなければならなかった。しかし、教育として携わった仕事が文献係という文献検索の仕事であったことはいかに図書の閲覧という仕事が大変なことであるか、そして学問研究の上で大切であるかということを今もって骨身にこたえて知るきっかけとなっている。あの時、もしIndex Med-icusで探し出した図書が揃っていなかったら、またあっても貸出などで戻っていなかったら、などなど不安な材料はたくさんあった。しかし、私の利用した内科の図書室では何も気づかなかったくらいに係の方々によって図書が整理されていたのは、今思い出しても感謝せずにはいられない。

次のような失敗とも言えぬ笑い話がある。私の恩師の前川先生は物凄いばかりの読書家であった。学生時代の講義の中には常に内外の最新の情報が取り込まれていた。このことは、私が助手となった最初の役割が文献係という他の教室にはない仕事であったことでも分かる。とにかく、先生は文献に明るかった。内科の図書室でも本がなければ、まず前川先生に電話してみろという具合だった。このことは前川先生にとっては名誉なことでもあったが、また迷惑なことでもあった。とりわけ図書持ち出しの嫌疑がかかっては。ある時、先生の臨床講義のために借り出した文献の中に私の研究に関係の深い非常に興味のある論文があった。それで講義が終わったらすぐに返却すべきところをそのまま私が拝借していたところ、図書室から返却の催促の電話が先生の許にかかったものだからたまらない。今までの分まで全部私のせいにされて、今後図書が返らないときは田村に聞けということになってしまった。私は有能な助手ではなかったが、このような形で先生のお役に立つこととなったのである。

1年6ヶ月、次の助手と交替するまで私は文献係を勤めた。お蔭で内科学の臨床講義のおおかたのテーマについて当時の最新の文献に当たることができた。その文献カードが今も本棚に積まれている。既に古くなり、誰も見てくれる人はいないが、当時は最新の文献を誰よりも早く、誰よりもよく読み、記入したabstractの内容には深い愛着がある。今この古いカードは私の文献検索という仕事を通じて学ぶことのできた生活の記録であり、尊敬する恩師の教えが最もよく残っている貴重な文献資料である。